

ラグビー選手における反復性肩関節脱臼術後の タックル指導効果

○井上 泰博 (いのうえ やすひろ) (PT)¹⁾, 藤森 裕磨 (PT)¹⁾, 福田 明雄 (PT)¹⁾,
椎木 孝幸 (PT)¹⁾, 小川 卓也 (PT)²⁾, 小柳 磨毅 (PT)³⁾, 中川 滋人 (MD)⁴⁾

¹⁾ 行岡病院 リハビリテーション科

²⁾ 八尾市立病院 リハビリテーション科

³⁾ 大阪電気通信大学 医療福祉工学部

⁴⁾ 行岡病院 スポーツ整形外科

【目的】

ラグビー選手における反復性肩関節脱臼術後の再発は大きな問題であり、不良なタックル姿勢が発生要因の1つと考えられる。そのため、術後の正しいタックル姿勢の獲得は、再発率の低下に繋がると考えられる。本研究の目的は、脱臼肩の術後、タックル姿勢の指導や正しいタックル姿勢をとるためのトレーニングの介入により、タックル姿勢が改善するかを検証することである。

【対象と方法】

対象は、術前にタックル姿勢の解析を行った反復性肩関節脱臼のラグビー選手9名10肩で、術後にタックル指導の介入後、術後8ヶ月に再度解析を行った。対照群は同世代で脱臼歴のないラグビー選手7名14肩とした。両側でのタックル姿勢を高速動画撮影し、矢状面、水平面での2次元動作解析を行った。解析指標は、脊柱後彎角度、重心位置、コンタクト距離、体幹側屈角度とし、非タックル側への体幹側屈を(+), タックル側への側屈を(-)と定義した。

【結果】

患側における術前後の変化(術前/術後)は平均で、脊柱後彎角度:38.5度/28.4度、重心位置:79.8cm/73.1cm、コンタクト距離:23.1cm/12.2cm、体幹側屈角度:-4.2度/5.3度と、全指標で術後、有意に改善した。また、術後患側の値は術後健側と比較しても差はなく、さらに健常対照群と比較してもタックル姿勢に差はなかった。

【結語】

術後、不良なタックル姿勢は改善し、健側および健常例と差がないタックル姿勢が獲得されていた。